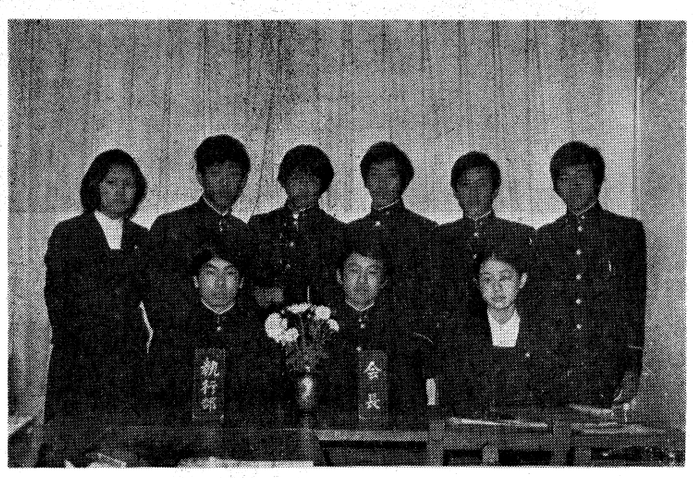
向陽新聞
高知市塩屋崎町1-1-10
土佐中・高校新聞部
編集人　吉本匡伸
発行人　樋口豪
印刷　高知印刷

写真
TEL ㉒6758
大丸東入口前
高橋

岐路に立つ生徒自治

生徒会の再検討を
生徒の自覚高まる

◇四十七年度後期執行部は、前期終了の九月いっぱい正副会長の立候補者が一名もなく、十月に入っても募集を続けたが、半期考査まで一名の立候補者も出なかった。半期考査以後も募集を続けたが、事態を重く見た前期執行部は、
◇十一月六日のホームルームで〝執行部のあり方・今後執行部をどうするか〟を話し合わせた。また、十日には五・六時間をカットして講堂で討論会を開いた。十三日のホームルームでも執行部について話し合われ、その後、十四日に会
◇長候補三名、副会長候補三名の立候補者が出て二十二日に選挙が行なわれた。異例の二ケ月遅れでやっ
◇とのことで四十七年度後期執行部が誕生した。このことにより一般生徒は執行部存在や役割について以前より認識
◇し、現在の執行部の体制について反響を呼ぶことになった……。


新執行部のメンバー

四十七年度後期執行部は、前期の任期満了を過ぎても一人の立候補者が現われなかった。十月に入っても募集を続け、その間、各クラスから立候補者を指名してもらい、正式に立候補してくれるよう要請したが、一人もこれに応じなかった。半期考査以後も募集を続けたが、事態を重く見た前期執行部は、十一月六日のホームルームの時間に〝執行部のあり方〟〝今後執行部をどうするか〟について、クラスで班ごとに話し合わせた。前期執行部は会の参考資料として、生徒会のしくみや、今後執行部の進む道を三つ例をあげたプリントを配布した。（それにより初めて生徒会のしくみを知った生徒もかなりいたようであった）そこでいろいろな意見が出された。プリントにあった責任内閣制にするということを支持する意見、始めからやり直そうという解散論、立候補者が出るまで待とうという意見など。

十日金曜日には、五、六時間の授業をカットし、講堂で討論会が開かれた。先生側から元吉先生・西森先生・西本先生、生徒の方は高一・高二・高三の代表が各一名、前期会長の西村君が壇上に上がり、生徒委員会議長の司会で行なわれた。元吉先生から「今、生徒会について充分考える時である」という革新的な意見が出されたが、この会は全体に低調であった。

十三日のホームルームの時間にも執行部について各クラスで話し合われた。

そして十四日にやっと会長候補三名が現われ、副会長候補三名が現われ、二十一日近年にはめずらしく正副会長とも信任投票でない選挙が行なわれ、ここに遅れること約二ケ月で、新執行部が発足した。

この二ケ月間の始めのうちは一般生徒は「俺には関係がない」といった態度でさほどの関心を示さなかったが、ホームルームや討論会で話し合うことにより、関心を示し始め自覚が芽ばえてきた。正副会長の立候補者が各三名ずつでたことほそれを実証していると言えよう。

ここで問題になってくるのが執行部・生徒会の有り方・体制である。一般生徒から「会長や執行部には何の魅力もない」「代償のようなものを与えないと誰もやり手はいないだろう」という声を多数聞かれた。また元吉先生が討論会で語られた「今こそ生徒会について考え直すチャンスである」という言に注目し考える必要があろう。

生徒手帳の土佐高等学校の常任執行機関会則には執行部について、「執行部は土佐高等学校の常任執行機関である」と記され、ほかに、各担当委員の仕事が簡単に書かれている程度である。会長については、「会長は本会を代表し、これを総括する」と記され、会長の権限については、「土佐高等学校生徒会における会長及び副会長の権限はすべて執行部の決議をもってその効力を発揮する」とだけしか書かれていない。

昨年度の後期執行部が今年の二月に文化祭を行なおうと運動を進め生徒委員会の承認を得、文化祭小委員会を設置し着々と準備を進めていたが、職員会議で〝準備期間が短かい〟などの理由で否決され結局行なわれなかった。執行部が生徒会の最高執行機関といっても職員会を前にしては何もできないといってもよいといっても過言ではない。

また執行部の体制事態にも問題があるのではないか。知り合いに集めてくるため、一般生徒との断絶はさけられないのではないだろうか。

これを機会に生徒自治についても考える必要があろう。

ひとこと

〝広〟と〝狭〟

○…文化祭がある。最後まで出しぶって、難産に難産を重ねたあげく、ようやく成立した執行部も、中央委員会、文化部連合会共々、ガンバッテ構想をねっている。

○…〝バザー〟といえば、何故か土佐女子の〝バザー〟というイメージがあるそうな。そのために頭の出来の悪い輩は「土佐女子のバザーを見本にして…」というが、とんでもない話。マンネリにマンネリを重ねた、身動きのとれない状態、つまり、イメージの中のバザーが強過ぎて、それから外れることのできない状態が〝バザー〟なのだ。文化部などの展示の中には、社研のように、かなり内容のあるものもあるのだが、いつもかんせん会場の雰囲気に新しいものが感じられない。

○…〝バザー〟は結局のところ毎年同じことしかやっていない。しかしながら、人気があり、有名なのは何故だろうか。

「昔からやっているせいじゃないか」と当の土佐女子生は言うが…。私はもっと他のところに、その理由があるような気がする。というのは、生徒と学校の力の入れ方が大きいというところだ。なにしろ規模からしてちがう。予算の面では、請求額だけもらえるという力の入れ方。これが長年の人気を保つ原動力のように思うわけだ。

○…さて、本校の方に話を移してみよう。会場の広さは、高新ホール、講堂、高三教室、理科教室等、とかなりのガンバリを見せているものの、〝二階と三階は使わないゾ〟と学校側がつむじを曲げてしまっているので、会場が点在したといった感じで、まったく白けてしまう。また、費用を限定して、これを折半せよとしているあたり、いかにも寂しい。軽く見つもっても五十万は下らないと思われる土佐女子に対し、〝四十万弱〟ちなみに文化部数は本校の方が多い。

○…また、精神的な面からいっても劣る。〝二階と三階を使わさない〟というのがその代表的なもので、このため、一般参加はおろか文化部の方もちょっとおぼつかない。〝一般参加を多くする〟とかいう学校自身の目標にも反する。少なくても学園内の行事の一つとして決まっているはずである。どうして、こんなに矛盾を作りたがるのか。

○…ここでいたいのは、是非とも、二・三階の使用を認めて欲しいという事である。物を拡大するということは、欠点を目立たせるという事にもなるが、その反面、見る物を圧迫し、注意力を散漫にした結果、かえってよく見えるようにする効果がある。未熟な私達には欠点をカバーすることが必要なのだ。量より質の展示を強要するのは少し酷である。

○…しかし、本校の無干渉主義もここまでくれば大したものではないか。

（H・K）

主張

GIVEandTAKEの精神で

やっと執行部の危機が峠を越えたという感じである。従来より停滞気味であり、選挙時に立候補者がいないこともしばしばの生徒会であったが、去る十一月十日の五、六時間目に授業を返上して生徒会が開かれた。

授業返上の生徒総会というのは我校創立以来全く異例のことである。執行部の運命は正に風前の燈火であった。ところが大部分の生徒はさほど危機感を感じているようには見えず、執行部員など一部の生徒のみが焦っているばかりである。これは生徒活動も同じ様な状態であることを示している。熱意に満ちた当選者が悲観論、楽観論とさまざまな生徒の反応のなさを嘆きながら七転八倒の末挫折し、後に残るは空しさだけ……喜劇でありまた悲劇である。そして片側ではこれに気も付かず、自分のことで手いっぱい。『隣は何を……』とも思わない様子である。

このほどの総会では前もってHRなどで意見を出し合い各人の自覚を促した後に開かれた。ちなみにテーマは「生徒会の必要性の有無と今後の方針について」である。

総会は約二時間にわたり執行部関係者や先生方の意見の聴取とそれらに対する質問の形式で行なわれた。

悲観論、楽観論とさまざまであったがいずれも興味深く聴ける内容であった。全体的に現状を憂うものが多くを占めていたのであるが、少し趣を異にするものに元吉先生の〝今こそ生徒会について考え直すチャンスである〟があった。そして同時に執行部がきないようになっている機構を指摘された。

なるほど生徒手帳には「生徒会は生徒に関してあらゆる決議実行の権限を持つ」しかし決議行動には学校長の承認を得なければならない」などうやむやな点があるほか、執行部会長の権限にはほとんどノータッチである。

今度の総会により過半数の生徒が、生徒会は生徒の自治と思っている反面協力はしないということが明らかになった。外界では余暇時代とかレジャー時代とか言われているようであるが、受験体制下では余暇は少ないだろうし、無気力を育てるかもしれない。しかしこれに甘えていては本当に味もそっ気もない灰色の学園になってしまう。

また現に僕達はクラスマッチや文化祭などによって多大なる慰安感を得ているのではないか。そしてそれらの行事の企画のために苦労している人達がいることを忘れてはならない。『空しき執行部』のままで終わせないために、僕達は彼らに何らかの反応を示してやろうではないか、GIVEandTAKEの精神で。

思い出は美しく

中学、高校生活を通して最高の思い出は何といっても修学旅行であろう。

今年度の修学旅行も例年通りに行なわれた。この旅行に先んだって、一日に何時間もバスにゆられるということを心配していた。しかしこれが修学旅行中の睡眠不足解消の場と化し、ほとんど問題にならなかったのはどう考えればよいのだろう。中学、高校を通してかんせん会場の雰囲気に新しいものが感じられない。

○…〝バザー〟は結局のところ毎年同じことしかやっていない。しかしながら、人気があり、有名なのは何故だろうか。

「昔からやっているせいじゃないか」と当の土佐女子生は言うが…。私はもっと他のところに、その理由があるような気がする。というのは、生徒と学校の力の入れ方が大きいというところだ。なにしろ規模からしてちがう。予算の面では、請求額だけもらえるという力の入れ方。これが長年の人気を保つ原動力のように思うわけだ。

○…さて、本校の方に話を移してみよう。会場の広さは、高新ホール、講堂、高三教室、理科教室等、とかなりのガンバリを見せているものの、〝二階と三階は使わないゾ〟と学校側がつむじを曲げてしまっているので、会場が点在したといった感じで、まったく白けてしまう。また、費用を限定して、これを折半せよとしているあたり、いかにも寂しい。軽く見つもっても五十万は下らないと思われる土佐女子に対し、〝四十万弱〟ちなみに文化部数は本校の方が多い。

○…また、精神的な面からいっても劣る。〝二階と三階を使わさない〟というのがその代表的なもので、このため、一般参加はおろか文化部の方もちょっとおぼつかない。〝一般参加を多くする〟とかいう学校自身の目標にも反する。少なくても学園内の行事の一つとして決まっているはずである。どうして、こんなに矛盾を作りたがるのか。

○…ここでいたいのは、是非とも、二・三階の使用を認めて欲しいという事である。物を拡大するということは、欠点を目立たせるという事にもなるが、その反面、見る物を圧迫し、注意力を散漫にした結果、かえってよく見えるようにする効果がある。未熟な私達には欠点をカバーすることが必要なのだ。量より質の展示を強要するのは少し酷である。

○…しかし、本校の無干渉主義もここまでくれば大したものではないか。

（H・K）

文化祭

学園祭的なものにはりきる新執行部

「何でもかんでもいろいろと手を出したいと思っています。根本的な改革など根の深いものはおいておいて、一般生徒の方から希望を聞いて、みんなに直接関係のある表面的なことをやっていきたいと思います。それによって執行部というものの存在をはっきりと認識してもらおうと思っています」と語る西森君を会長に後期執行部が発足した。二か月近く遅れて誕生しただけに遅れを取りもどそうとなかなか活発な活動を行なっているようだ。

新メーンバーは次の通り。

会長…西森　央君（二H）
副会長…加藤　久宣君（一H）
伊与木敏郎君（一O）
書記…猪野孝子さん（二H）
植木　隆浩君（一N）
会計…竹田知子さん（一O）
HR担当…服部　弘君（二H）
広報担当…傍土　清志君（二H）
美化担当…小野朝子さん（一K）
各部担当…美馬　敏宏君（二T）

新会長の西森君は、二か月近く遅れて発足したことについて「僕はこういう事態になったのは、執行部そのものに問題があるのではなく今の高二の消極的な性格に問題があるのだと思います。偶然今の高二で会長・副会長の候補が出なかっただけでこれだけを見て一般生徒の関心がどうこうというのは、若干考え過ぎではないかと思います」と語っている。

そのほかの質問対しては次のように答えてくれた。

―一般生徒の無関心はどう対処してゆくつもりか。

無関心ではいられない活動を行なってゆくつもりです。一般生徒のこの身のまわりのことから手をつけていくつもりですから、一般生徒の方としてもどうしても知らん顔するわけにはいかなくなると思います。

―文化祭については例年の文化部発表会という内容を打ち破って、所謂学園祭的なムードにしていきたいと思っていますが。

かんせん会場の雰囲気に新しいものが感じられない。

○…〝バザー〟は結局のところ毎年同じことしかやっていない。しかしながら、人気があり、有名なのは何故だろうか。

「昔からやっているせいじゃないか」と当の土佐女子生は言うが…。私はもっと他のところに、その理由があるような気がする。というのは、生徒と学校の力の入れ方が大きいというところだ。なにしろ規模からしてちがう。予算の面では、請求額だけもらえるという力の入れ方。これが長年の人気を保つ原動力のように思うわけだ。

○…さて、本校の方に話を移してみよう。会場の広さは、高新ホール、講堂、高三教室、理科教室等、とかなりのガンバリを見せているものの、〝二階と三階は使わないゾ〟と学校側がつむじを曲げてしまっているので、会場が点在したといった感じで、まったく白けてしまう。また、費用を限定して、これを折半せよとしているあたり、いかにも寂しい。軽く見つもっても五十万は下らないと思われる土佐女子に対し、〝四十万弱〟ちなみに文化部数は本校の方が多い。

○…また、精神的な面からいっても劣る。〝二階と三階を使わさない〟というのがその代表的なもので、このため、一般参加はおろか文化部の方もちょっとおぼつかない。〝一般参加を多くする〟とかいう学校自身の目標にも反する。少なくても学園内の行事の一つとして決まっているはずである。どうして、こんなに矛盾を作りたがるのか。

○…ここでいたいのは、是非とも、二・三階の使用を認めて欲しいという事である。物を拡大するということは、欠点を目立たせるという事にもなるが、その反面、見る物を圧迫し、注意力を散漫にした結果、かえってよく見えるようにする効果がある。未熟な私達には欠点をカバーすることが必要なのだ。量より質の展示を強要するのは少し酷である。

○…しかし、本校の無干渉主義もここまでくれば大したものではないか。

（H・K）

全国共通テスト

活用法は検討の段階
○×式客観テスト

大学の入試改革、高校教育課程の変更と、ここ二・三年は、大きな過渡期となりそうである。

〈大学の入試改革〉

先日、新聞紙上やテレビをにぎわしていたので、すでに知っている人も多いと思うが、国立大学では全国共通実力テストを実施し、各大学の各学部毎に行なう従来の入試と二本立てとすることになりそうである。

実力テストの結果は、混乱をさけるため大学内だけにしか通知されないが、これの利用法は義務づけられていないため、結果の利用は大学別で違ってくるものと考えられる。今のところくわしいことは全くわかっていないといっていい。ただ、志望者が多い事があれば、〝足切り〟に利用するのは必至とみられている。

また、テストの形式は、当面コンピューターを利用するため、高程度から低程度まで〝○×式〟の客観テストになり、〝つめ込み〟その他の欠点を是正する方向でたとえば、問題作成委員を毎年変更して〝傾向と対策〟的受験勉強を防止するよう検討していく予定らしい。しかし、かえって受験生のとまどいを増すのではないかとも見ている人も多い。

これらはあくまで〝推測〟であって、結局入試の前年にならなければはっきりした〝答え〟は出ないものと見ることができよう。

〈高校教育課程の変更〉

本校の場合は、主要三課目には選択方法に変更はないが、理科は従来、高一で選択していたものを高二とし、高二では、文化系、理数系とも物理、化学を必修とすることになる。そのため、現中三は高校の生物をやっているし、中二は来年やはり高校の生物をやる予定だという。

社会類は、日本史、世界史、地理の三課目とも学習していた今までとは違って、二課目を選択することになっている。

〈系統別大学志望状況〉

先日、現中三で系統別大学志望状況の調査が行なわれたが、その結果、理数系志望は七十九名、文化系志望は一九五名と理数系の方が多くなっている。これに先立っての説明会で竹村先生（教務）が理数系優先の時代は終わったかどうかということである。新学部の来年度開設認可申請を見てみると、歯・医学部、薬学部、人間関係科、電気工学科、農業工学科などが、かなり目立っている反面、経営学科、法学部、英文科、児童教育学科などかなりの伸びを示している。しかしながら、理数系優先の時代はこう当分続くのではあるまいか。また、近年〝何か一つ専門を持つ〟ことが社会で重要視される傾向にある。となると、どうしても文化系は不利で、企業に人気の学部の多い理数系が有利という答えが出てくる。

レジャー

お好みミュージック

近頃昼休みに三〇三号室で「特集番組」が行なわれている。

これは放送部が、広く生徒一般に音楽を楽しんでもらい、またそれによって放送部の存在を意識してもらうために行なっているものの評判はあまり芳しくないようだが、番組によっては好評のようだ。

放送部では、「生徒の反響が生で感じられたことは、非常に貴重な体験だったと思う。またこれによって、放送部がこれからの活動を活発化してゆこうという目的を多くの人にわかってもらえたと思う。これからは、大衆に受け一方にかたよらずに、いろいろな分野の新番組を作ってゆきたい」と言っていた。

みなさんも一度行ってみては…。

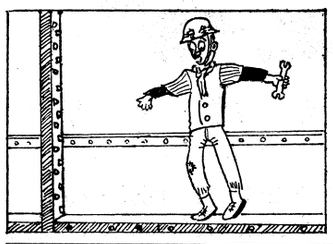
とび職人がサーカス？

新体育館建築現場でひときわ生徒の目を誘うのが、飛び職のおじさんのつな渡りならぬ鉄骨渡り。天井の一部の鉄骨の上をスイスイと歩いていって作業をする。これにはさすがの優等生たち（？）も大歓声。

すると、その声を聞いたのか、そのおじさんは、立ったままでたばこを吸ってくれた。それに、下の人と話しをしたり、なかなか落ちついている。

「ひょっと、落ちんろうか」「落ちたら、おもしろいに」などと無情の声もちらほら聞かれる。

そして、作業が終わるとそのおじさん、エレベーターを降りるかのようにクレーンのつり金にまたがりスルスルと降りていったので我々はまたも大喜び。それに、担当の先生までも…。



ルポ

ある平凡な一日

ある平凡的均な生徒の平凡な一日―朝眠いのを我慢して学校へ。そして耳を傾けず、目で黒板を追いひたすらノートをとる。放課後、何ともなしにブラブラしていて、気がつくと家に帰っている。夜はテレビを見て、勉強しているのか遊んでいるのか、とにかく自分の部屋にいて、いつの間にか眠りにつく▼〝おまえの生活で楽しみは何だ〟っていわれたら何と答える？ある男はいわく「食って眠ることよや」別の男いわく「他人の不幸を見ることちや」…そして何もない男の何もない青春といわれるものが過ぎさってゆく―最近何となく我々にとって動きづらい世の中になっているのは確かである。四無主義とやらのブームはもう過ぎ去ったらしいが。いつか新執行部も誕生したし、十二月になるとまたもや考査が一つすぎる。そして、紅白歌合戦に付き合って夜ふかしすれば、もうことしも過年になる…こんな隔世観を抱いていても、浮世の風は冬の木枯しよりも冷たく、いつか窮地に立つ▼来春にはまた月謝が五百円上がる。名目は建築協力金である。これも最近の目を醒るばかりの物価の高騰から仕方がないと思えばそれまでだが…でも何かふっきれないものがあるのはわれわれだけだろうか。しかし、現に学校のうどん代、パン代、通学定期代にしろすべて、五年前の五〇％以上の値上がりをしている。たぶん、みんなそれぞれ物価上昇の感慨？なるものをもっているだろう。〝上がらないのは成績とこずかいばかりなり〟とは誰のいった言葉か▼しかし、こうして鰻上りに上っていく月謝も親から銀行への振込方式になって以来、てんで当方には縁の遠いものに思われ出した。月謝はいつのまにか学校へ。今を去る三年程前までの、大金をもって学校へ行く緊張感も、月一度何がしかの授業が中断されるという楽しみも、消えてしまった▼気がつけば、もう一年は過ぎ去っていた。なんて生活は送りたくないもんである。われわれは私立校に通っている、多額の金を払って学んでいる、と露骨にかまえて、学校を媒介とし、より以上の有意義な生活を送りたいものだ。そこで毎日、目をらんらんと輝かせ、時間に後押しされず、学校にのりこんでこようではないか諸君！

（A・K）

どんなものからでも
電子リコピーでOK!
電子リコピー サービスショップ
山元文具事務機部
高知市梅ノ辻八番十二号
TEL 代表 ㉝ 3101

3秒5秒間で…
シートもの、ブックもの……
どんなものでも、5秒間で複写してお渡しします。
書籍・楽譜・講義ノート・教材テキスト・テスト問題

記録しておきましょう。
思い出の宝庫、学園生活
その輝ける一瞬を
フジカラー
たのしさを売る
キタムラのキムちゃん
キタムラカメラ
サービスチェーン店
中村店 升形店 アタゴ店 本店 追手筋店 サエンバ店 さんばし店 安芸店
堺町 2―26 TEL㉒―1641（代）

故郷に暫しの別れ

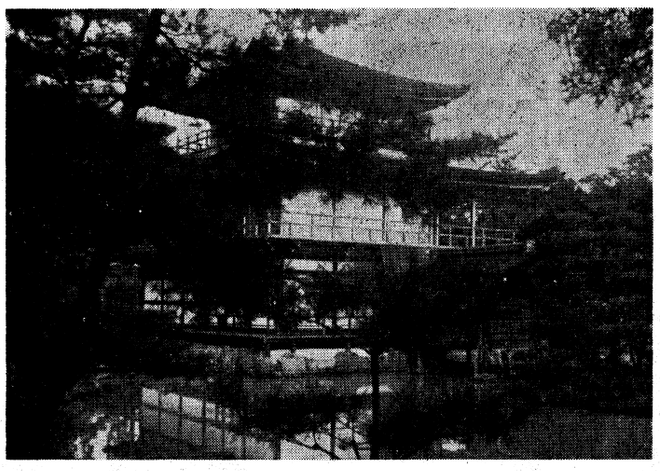
一日目

高知→高松～～宇野→岡山→京都

八時二十二分、高知駅を出発、あるものは母に、あるものは父に見送られて……。

高松駅について、連絡船に乗りかえた。押し合いへし合いして、どうにか船に乗ったが当然の結果として席へ座れず甲板へ。甲板に上がると、美しい瀬戸内海の島々が眼中に飛び込んできた。〝なかなかえい、絵になっちょる〟というのが第一印象だった。甲板に上がっても何もすることがないし、腹が減ったのでうどんを食った。あそこのうどんは手打ちで仲々うまい。

美しい瀬戸内海を後に、宇野・茶屋町と列車は走り岡山駅に着いた。



彼の有名な京都の金閣寺

二日目

旅館―二条城―金閣寺―清水寺―京都駅―小田原―箱根

昨夜旅館「三木半」の十時、消燈はずぎたというのに僕を含めた四、五人の連中が合唱会と称して歌を唄っていました。すると五分とたたないうちに酒でうかれた正木主任が見まわりにこられました。「早く寝ろ」と言われるのはもっともなことですが、そのくらいで寝つけるようなつくりじゃないのです。

いつのまにか五時をまわっていました。みなさんまだ寝てたようでしたが、ここぞとばかりにMSがわめきはじめたので自がさめたようです。

午前八時バスで二条城へあいにくの雨模様でしたが、けっこうはしゃいでいる人もいました。城内の見学は僕達の数が多すぎたのでしょうか、説明してもらう五分立ち下さい」などとやられるのです。それが一度ならまだしも、二度三度となってくるといささか頭へくるものです。

この二条城の廊下は「うぐいす張り」とかいうつくりだそうで板を踏みつけるたびにキュッキュという音が出て、遠くから聞くとあたかもウグイスが鳴いているように聞こえる仕掛だそうです。ガイドさんに、これは設計のミスが逆にケガの功名になったのではないかと聞いてみます、そうではないそうです。しかしどう聞いてもホーホケキョとは聞こえないですね。

城を出ると雨はぱったりやみました。京のにわか雨とはこんなものかと思いながらバスへ乗り、こんどは金閣寺へ向かいます。着いて見てみるとどうも僕の目には金には見えないのですが見えないところがいいところだそうです。

続く平安神宮は下車する間がなくて素通り。清水寺へ着く。何でこんな名がついたのかについては「旅ゆけば」の中のことばをかりますと、昔々とても偉い坊さんがここの廊下でころんだそうで、すると廊下は木でできましたからしたたか頭を打ちつけた坊さんは「木よ水になれ」と言ったそうです。だからこの寺は「木よ水」となり、それがなまって「清水」になったという次第です。

こんな具合に無事京都見学をすませ、「こだま」で小田原へ向かいました。例のMSなどは光より速いとか何とか言って列車の中を走っていました。だいぶ暇な男ですね。

小田原へと〝西部バス〟というバスが待っていました。僕達のガイドさんは自称十九才。稀に見る美人（？）です。これから五日間のうち誰がモノにするかが問題なのです。

（K・T）

三日目

箱根―山中湖―富士五合目―甲府―白樺湖

いよいよ三日目から長いバス旅行の始まり。標高千メートル余りの所にある山中湖は朝早かったのも手伝って、風が身にしみる程冷たく感じられました。湖の向こう側の白いホテルではこの冬と澄みきった湖面は、きっともっと違った感銘を私に与えてくれるのではないかと思いました。山中湖をあとに私達のバスはスバルラインを通り、富士山五合目へ。私の隣りの人は〝雪合戦をするぞ！〟と息こんでいたのに、残念な事に雪はほとんど頭の上でキラキラと輝いていました。友人は先鼻をくじかれてガックリ。山中湖以上にここは寒く、コートをかけて店に設けてあるストーブの前でブルブル震えっぱなし。富士山なんかどこ吹く風といった感じでありました。上ってくる時外出時間は五時から九時までであった。ちょうど、学生の反戦デモとぶっかり合ったので待ちぼうけを食った。高知とは全然スケールが違って大きい。

適当にどうにか旅館に帰り着くと、反戦デモに影響されたのか数人の男子が〝ベトナム戦争〟について討論していた。聞いていると今までわからなかったような友達の考えや性質がわかってくる。こういう所にも修学旅行の収穫があったようだ。

（A・T）

四日目

白樺湖―川中島古戦場善光寺―須坂リンゴ園―志賀高原

早くも四日目である。全くもう寒いのなんのってごこはもう真冬、息が白く見えた。情趣満点の白樺湖を後に向かわんとするのは川中島古戦場である。連日の睡眠不足でバスの中は実にいい気分。どこをどう通ったやら川中島につく。中学の時地理で習った犀川の州である。ここはその昔、武田信玄と上杉謙信が戦った所だそうだが、どうということはないのだ。千何百万円かけて造ったという銅像があり、案内役のおじさんが上杉謙信に〝粉して刀を振り廻していた。このおじいさん実に口達者で、おもしろいほら話をさんざん聞かされた。

再びバスにゆられて着いたのは今も思い出すたび胸がむかつく善光寺。ここでとった昼食は旅行中一番まずかった。ハシをつけた程度で〝飛び出し〟〝食べ直し〟である。幸いにここでは、信州そばで有名な長野県。通りの両側はそば屋が軒を連ねている。どちらにしようかな、とのれんをくぐれば白線が四、五人程、「ムッ！おぬしもか」とは友人の言。天プラそばは二百五十円でした。

善光寺の境内にはハトがたくさんいるのですが、女の子がハトに豆をやっている所などは実に絵になっているのです。長野市には寺がたくさんあるそうです。この善光寺は案外大きな寺で石地蔵や建物がたくさんあるのです。本堂の前には大きな香炉があって線香の香が満ちていました。

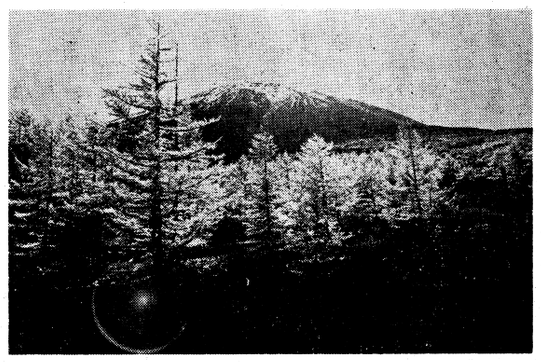
信州そばで有名な長野県で、もう一つ有名なものといえば、リンゴなのです。

おやつの時間少し前にナントカという（須坂）リンゴ園に到着。さっそくリンゴの林の中にかけ込むと（なんでも好きなだけ食べてよいそう）木になっているリンゴがコツンと頭に当たります。石灰をかぶって白味がかっているリンゴをそでで ふいてやると真赤にツヤツヤと光って食べてしまうのがもったいない位。リンゴ園にて約半時間、やっと三個食べ終える園内で食べたリンゴの他に各々五個まで持って帰ってよいとのことでした。（後で わかったことだが、我クラスに八個もリンゴを食べた者がいたそうである）

さてと、今日の予定はこれで終り、今夜の宿泊地は志賀高原。例によって例のバスで「ホテルニュー志賀」へ、（このホテルはこんどの旅行では一番人気があった）さすが山国で日没は早かったが途中車内から見た山姿の美しさは格別でした

その夜、トランプで負けた者はリンゴを気分が悪くなるほど食べさせられたということであった。

（G・H）



見え隠れする富士の銀峰バスの中に歓声があがる

五日目

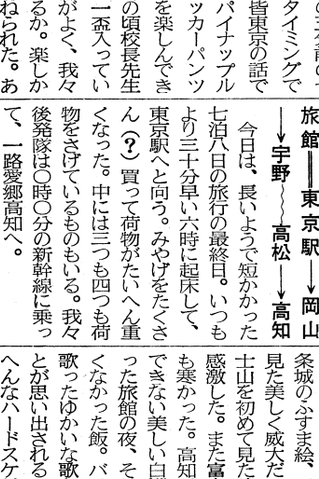
志賀高原―白根山―鬼押出し―小諸―軽井沢

ホテルニュー志賀を六時起床、七時朝食、出発は八時、十分前には全員バスに乗っていること。また、一日の始まりです。

この〝ホテルニュー志賀〟は七泊した中で最高だったように思います。ゲームは勿論、ボーリング場なんかもあって、皆さんそれぞれ楽しんでいらっしゃったようです。私はアイスクリームを三回か四回買いに行って、フロントの人にバカにされたのです。食事はTHOとKSNの二つに分かれましたが、四人で一つのテーブルを囲む形で楽しいただけました。でも、男子の食欲のすごさには驚きでした。食べるために生きているといってもいいくらいではなかったでしょうか？まあ、いいではありませんか。白樺林の中、白樺は志賀高原の方が白樺湖より目につきました。高原ルートを経て白根山到着。とっても寒くて、また風も吹いていて耳が痛くなりました。山頂めざしてゾロゾロと登って行くと、黄青色をした水（？）をたたえた火口が見えました。その色の奇妙さにビックリ。ここで記念撮影というのはよく注意してないと無視されます。次は、またゾロゾロと売店へ。そこにはストーブがあって暖かでした。高知の感じでいくとおかしいかもしれないけど、でもちっとも不自然じゃありませんでした。すごく大きなおせんべいがあって、後で友達にわけてもらって食べたけどちょっとしめってました。また、バスに乗り込み草津を経て鬼押出しで昼食。お弁当の蕎が、壁掛けになっていておみやげにと、取ってお帰りになった方も多いこと と思われます。浅間山の大爆発によって出来たというすごい岩がゴロゴロしてました。お天気も良かったせいか、とってものんびりした気分でした。さて、小諸動物園のアヒルがかわいくて、よちよちこっちにやって来たんですよ。懐古園を一応回ってみて、やっぱりどこか静かな落ち着いた味わいのある所でした。ポツンとあった白樺の木がなぜか印象的でした。それにしても〝無料休憩所・有料トイレ〟というのはおもしろかった。

やっとホテルに着いたけど、これは何ということでしょう。軽井沢のイメージまるつぶれ！田んぼの真ん中という感じでガッカリ。昨日のホテルニュー志賀と比べてこの下がり方はショックでした。なんとなくザワザワしておもしろくありませんでした。朝は特に寒くて起きるのがおっくうだったし、私の友達は熱を出してしまいました。やっぱりこんな避暑地には夏に行くものです。

（S・M）



鬼押出し園の入口にて……

六日目

軽井沢―榛名湖―沼田―金精峠―華厳滝

紙のマクラカバー

中禅寺ホテル

中禅寺―西参道（東照宮）―石橋―東京

軽井沢で むかえた朝は、頭に激痛がはしりのどがかれて、鼻水がでるというと少々オーバーであるが、簡単にいうとカゼぎみであった。ここで名物のそばまんじゅうとやらを二つ食べる。なんとなく風情のある風流な味がしたのでつい十個程買いもとめる。（家までもって帰るつもりであったが、旅館でつい一コと食べたのが運のつきで、みんなにみつかってしまい、しぶしぶわけるはめになった）

それから、渋川を通り、沼田で昼食をとりひたすら金精峠へと向かう。このあたりはさすがに紅葉がきれいだ。金精峠をこえると、湯元温泉であった。途中、戦場ケ原へ立ちよる。このあたりは古い伝説がまつわる所だそうな。空はどんよりと曇っていて非常に寒い。広い草原地帯にすっかり寒をおとした木々が点在し、いやが上にもさびしさが感じられる。ふと俊成の幽玄を感じたような気がした。

再びバスに 乗り、華厳滝へつく。ここはとりたてて書くほどのこともない。華厳滝をあとにして、やっと今日の宿である、中禅寺ホテルへついた。ホテルとは名ばかりで、御世辞にもよいなどとはいえず、この寒い日光で暖房の一つもなく、冷房があるかと思うところにおれており、部屋の中には物置きがあり、窓は閉じず、天井は破れており、ふとんはせんべいぶとんでマクラカバーは紙でできており、全く惨憺たるさまである。食事と言えば、みんなブタのえさ程度まずいといっていた。しかし、僕がいざ食べてみると美味とはいえないまでも、なかなかの珍味であった。自分はブタ程度だろうか？などと思ったりもしたが人一倍食べた。

僕は、はじめから修学旅行に期待するものなどなかった。自分から、むりに期待しないようにしていたといった方が正しいかもしれないは。ずれることが、はじめの自分において十分に予期し得たからである。しかし、平常の生活に戻った今において、自分とその周囲が、それ以前のそれらと違っていることは、火をみるより明らかである。

（S・N）

人気抜群、魚坂のリンゴ園↓

七日目

中禅寺―西参道（東照宮）―石橋―東京

きらびやかな日光東照宮を後にして、バスは一路東京へ。当初の予定より二時間程遅れて四時頃東京についた。級友達は最後の自由行動とばかりに、新宿へ銀座へといそいそと飛び出して行く。僕も友人四人と銀座へ。東大の赤門からがかわいくて、よちよちこっちにやって来たんですよ。懐古園を一応回ってみて、やっぱりどこか静かな落ち着いた味わいのある所でした。ポツンとあった白樺の木がなぜか印象的でした。それにしても〝無料休憩所・有料トイレ〟というのはおもしろかった。

やっとホテルに着いたけど、これは何ということでしょう。軽井沢のイメージまるつぶれ！田んぼの真ん中という感じでガッカリ。昨日のホテルニュー志賀と比べてこの下がり方はショックでした。なんとなくザワザワしておもしろくありませんでした。朝は特に寒くて起きるのがおっくうだったし、私の友達は熱を出してしまいました。やっぱりこんな避暑地には夏に行くものです。

（S・M）

八日目

旅館―東京駅―岡山―宇野～～高松―高知

今日は、長いようで短かかった七泊八日の旅行の最終日。いつもより三十分早い六時に起床して、東京駅へと向う。みやげをたくさん（？）買って荷物がたいへん重くなった。中には三つも四つも荷物をさげているものもいる。我々後発隊は〇時〇分の新幹線に乗って、一路愛郷高知へ。

列車の窓からけしきをながめていると八日間のいろいろなことが思い出される。あざやかだった二条城のふすま絵、バスから初めて見た美しく威大だった富士山、富士山を初めて見た時、ほんとうに感激した。また富士五合目はとても寒かった。高知では見ることのできない美しい白樺の林、楽しかった旅館の夜、そしてあまりうまくなかった飯。バスの中で大声で歌ったゆかいな歌といろいろなことが思い出される。しかし、たいへんなハードスケジュールであった。ほんとうにくろげたのは、十時の就寝以後だったように思われる。そして、ほとんど毎晩遅くまでいろいろなことを話した。また、普段の学校生活では見ることのできない級友のほんとうの姿を見ることができたような気がする。宇高連絡船に乗って、四国へと渡る。あともう少しだ。中にはホームシックにかかった者も何人かいるようだが、多くの者はあと四、五日ぐらいはだいじょうぶだといったぐあいにまだまだ元気だ。五時を過ぎるとだんだん日が暮れてくる。高知へ着いた時はもうまっ暗だった。駅から出た高知の町は何故か暖かく感じられた。

（M・Y）

帰って来たぞ!!

短かった一週間

一食四人で

一万四千円也

バートの向かいにある、その名も「らん月」ここで〝しゃぶしゃぶ〟という料理を食べる事にした。定食とやらを注文して、四人で二千七百円かと思いきや、これがなんと一人前、皆の顔は一瞬にして泣き笑い。しかし度胸を決めて食べた。給仕の和服姿のお姉さんが非常に親切で楽しく食事をし、料理もうまかった。四十分程で食べ終わり会計へ飲み物やサービス料などして一万三千九百七十円であった。それから地下鉄で東京駅に行き、各地の名産店で家の者への土産を買い、旅館に帰ってきたのが、門限の五分前の七時五十五分。グッドタイミングである。部屋に帰れば皆東京の話で持ちきり。ある者はバイナップルを買い、ある者はサッカーパンツを買い、皆最後の夜を楽しんできたようであった。その頃校長先生が回って来られて、一人入っていたのか、かなり機嫌がよく、我々に「元気でやっているか。楽しかったか」などと、暴れられた。あるのか、かなり機嫌がよく、我々に「元気でやっているか。楽しかったか」などと、暴れられた。あ

紳士服装専門店
お誂紳士服
高級既制服
紳士洋品
＜土佐高制服オーバー指定店＞
廣松屋
大丸北口前　TEL ㉒ 2338, 2339

皆様の――帽子の店
土佐中高指定
元田帽子店
高知市帯屋町二丁目南側
TEL ㉒ 二五九一

信用あるお店で安心したお買物を
通学用、旅行用かばん・袋物
マエダ
かばん店
高知市帯屋町一丁目　TEL 72―8600・8601

中華料理
龍園
高知市梅ノ辻57番地
電話 ㉝ 5271番

寿し柳
本店　高知市南はりまや町1丁目2―20　㉘0101
別館　高知市堺町11―1　㉘5103
支店　高知市帯屋町2丁目4―5　㉒5373
支店　高知市本町4丁目1―49　㉘5102
支店　高知新聞放送会館地下 レストラン寿し柳　㉘5101
支店　高知市帯屋町1丁目1―11 リラ地下食通街　㉘5100
支店　高知市重倉945正蓮寺 ゴルフ場内食堂　㊺1540

入文学服
本町中ノ橋電停前北側　TEL ㉓ 1101 代表

ブリタニー中学校訪問記
扇谷先生訪米

扇谷先生

▽この度の研修旅行の主催者であるCIE（国際教育交換協議会）からの通告で、私は八月三十日から九月十三日まで、二週間、ユニバシティ市（ミズリー州にありセントルイス市に、コブのようにくっついている小都市で、地図の上では人口五万以上十万以下の印がついている）に滞在し、九月五日から十三日までは、この市の二つの公立中学校の中、表題の学校にビジィター・ティチャーとして勤務することになっていた。

待望の新学期開始

九月五日、待ちに待った新学期の開始の日であり、初めて味わうアメリカの中学生との学校生活の始まりの日である。少し早目に起き、数日前に催された新学期を迎える準備の職員会の時にラム校長に言われた通り、「先生の手引書」の必要な各項目をもう一度確認した。八時十五分（生徒の登校は八時三十分まで）に間に合うよう急いで学校に向かった。

ミセス・サワーの家（私を民泊させてくれた家）を出て樫の木の生い茂る並木を両側に持つ舗道をリスがあちこちはっているのを眺めながら二分も歩くと大通り沿いに作られたゴルフ・コースの広々とした芝生の原につき当たる。それを左手に見ながら五分も行くと高い木立の向こうに、開けた田園風景？…もちろん田や畑はありませんが…が現われ、一目で学校とわかる二つの建物がクローズアップされる。右はブラックベリー小学校、左はブリタニー中学校である。折しも登校時とあって、各交差点にはクロス・ガードと呼ばれる制服の老人（大半が退役軍人だとのこと）が立ち、小学校の正門前の大通り沿いに上級生のクロス・パトロール達が肩に赤いたすきをかけ、同級生や下級生が舗道を横断するのを手伝っている。中学校の校門やそばの芝生の上では数名の男女生徒が三ケ月振りに（六月九日から九月四日まで夏休み）見る友達と笑顔を交し雑談に興じている。

ブリタニー中学校は、そう大きな学校ではないが、それでも、本校の木に囲まれた一部地下一階、地上二階の煉瓦作りの校舎があった。この中に約七百名の生徒、五十名の先生と事務、図書、食堂の職員十数名がいる。大半の教室が東西向いているこの校舎の北のいちだんと低くなったところには広い芝生の原の中に、アスファルト作りのトラックと小さな砂場アメリカン・フット・ボールのゴールのポールのある大きな運動場がある。民家が道路をはさんで学校の横に数軒、運動場の更に北の小高い所に小さく数軒見えるのを除いては、見わたす限り芝生の原と森。公害など思いもつかない。時計を見ると八時十二分。急いで玄関にいる生徒達に挨拶を交し笑顔を振りまきながらラム校長を校長室に訪ねる。挨拶もそこそこに私の所属する英語科の教室の並ぶ校舎の南東部にかけつける。各教室の入口では教科担任の先生方が生徒を笑顔で迎えながら出席をとっている。奥から二番目にある主任ミセス・アベルの教室へ向かうアベル先生の小さい身体は中二・三の生徒の大きな身体の中に埋れている。近づいた私の顔を見ると、「少し遅れましたね」という。時計は八時十六分三十秒だった。

先生は教室の鍵を開け、八時十五分かっちりに教室の入口に立ち生徒を迎えなければならないことになっている。各教室は教科担任が管理をする。だから先生は自分の授業にふさわしいように机、腰掛けを配置し、はり紙や図書用具その他を備え付けてある。教師のいない時は施錠してあるので教室には入れない。休み時間四分の間も先生は教室に留まり生徒は廊下の壁にはめ込みになっている大きなロッカー（本校の一人分を縦に三つ重ねたくらい）から学習用具をとってあちらの教室こちらの教室と速く移動する。生徒も先生もよくキーを持っている。女先生はネックレス代りに幾つものキーを首にぶらさげているし、副校長の腰には二・三十のキーがジャラジャラと音を立てている。

自由の中にも厳しさ

アベル先生に遅刻を詫びながら、彼女の教室に入る許可を受ける。八時三十分かっちりに先生は教卓につき、改めて二十五名（後でもっと小人数のクラスもあることがわかった）の生徒の出欠を確認し、欠席者の名前に印をつけて出欠事務係の「回収に」聞に合うよう、ドアーに取りつけたポケットに入れる。愈々五十分の授業の始まりである。不思議なことに生徒は教科書を持っていない。「この教室ではスピード・リーディングの講義と実習…主として実習がなされる。教科書はこれらです（と書棚のパンフレットや書物を指す）辞書もここにあるから使ってよろしい。皆さんの上達振りはこの機械で調べます。（と小さな箱型の機械を指す）。また速く読むには頭を動かさず眼を動かすことが大切です」と速く正確に読むことが日常生活に大変必要になったことの説明に続いて、授業のすすめ方が述べられる。

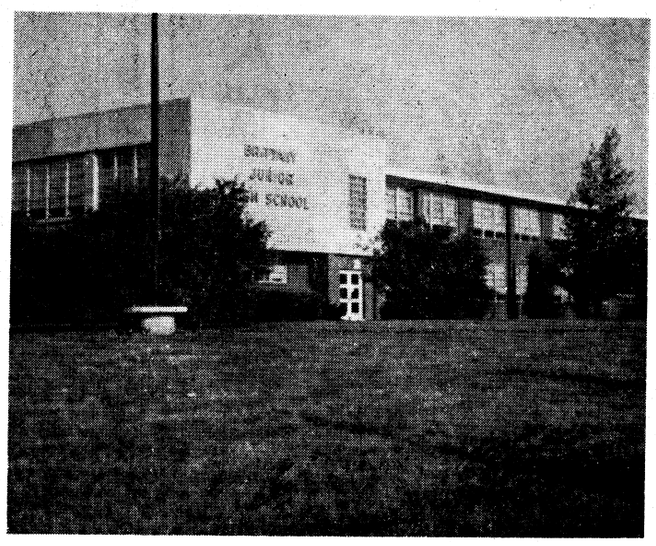
生徒の六割―七割（他のクラスでは五割以下のもあることがあとでわかった）が黒人又はカラード（有色人種）であり、中二・三年の混成クラス（中一を除いては大体混成クラスである…別に能力別でも、複式でもない、選択上こうなったもの…）である。大人のような大きな体格を持ち、大人のような振舞いをする男女から日本の中二の小さい人位までサイズもいろいろ。服装・装身具は何でもよいので、いろいろの色や形のズボン、ミニスカート、ホットパンツ、パンタロン、ブルージン、靴も編み下げ、ヒールの高いもの、ズック、イヤリング、ネックレス、ブローチ、ロケット、ブレイスレット、リングなど多種多様の物を身につけている。

やがて一人の男生徒が立ち上がって教室に備え付けの鉛筆削り（手動のもの）を作動させる。いくら削っても折れる。先生のところに行き鉛筆を貸してほしいと言う。先生は十セント金を取り「返したら無料だ」と言って一本を渡す。（先生の手引書のどこかに『教師は生徒に私物を貸したり与えたりしてはいけない』とあった…あとで質問すると自分で準備しない生徒が出てはいけないし、物の価値を知らなければならないという…もっとも時と場合、品物にもよるとのこと）

授業中、雑談をしたり、キョロ〜するのもいる。時折先生が「ヤング・ジェントルマン」とか「ヤング・レディ」又は男（女）の名前を言って注意を促がす。

やがてベルの音と共にベルの音の終らぬ内に生徒は廊下に出て行く（例の「手引書」に「ベルと共に終れ」とある。休み時間が僅かに四分しかないためでもあろう）。

アベル先生にお世辞と礼を言って廊下に出て、はて第二限は…どこにしたものかとぶらぶら歩いて行く。



豪華な食堂で
生徒と共に

体育館兼講堂は余り大きくはなかった。一部階段式になったしゃれた感じのものだった。校長の挨拶今年度の抱負、私の紹介等、三十分足らずで終了。体育館を出て、事務室に向って教室を通り越すと、小劇場（リトル・シャター）のプレートのかかった部屋がある。入ってみると常務員が、照明具の点検をしている。本校の小会議室と会議室を合わせて幅を少し広げた程度の大きさの劇場である。常務員にきくと、「授業にもよく利用します。特別の時に使うだけではないんです」とのこと。（後日見たのだが他の中学校、高校でも講堂兼劇場というのがあり、ほんとうの劇場のように色々の設備を持っている。幕も電動式で三段、生徒用の椅子は彫りものをあしらったものと豪華なものもあった）

愈々、昼食の時間がやって来た。どこかの学校のように命を賭けて走ったりしないが、時間の短い（約三十分間）こともあって足速に北端の地下にある食堂（キャフテリア）に向う。各階の階段に一名ずつ、食堂の入口に一名、食器盆を積み重ねた側に二名と先生が立っている。（この先生達はランチ・デューティーと授業同様時間割表に記入してある）。「何故ですか」ときくと「ランチ・タイムでない他のクラスの邪魔になってはいけないし、エスケープや食事中の無作法を戒めるためでもあります」と答えた。なるほど時間割表で昼食は三交代（十一時組、十一時三十分組、十一時五十分組と第二の組など授業の途中で昼食に行くことになっている）だったことを思い出す。

私も生徒の列に入り盆を持つ。一人の先生が「貴方はその必要はない」というのを「生徒と一緒に食べたいから」と断って順番を待つ。見渡すと、本校の体育館位の大きさで、ビニルタイルをはった床に、両側合わせて六個のパイプ椅子を持つテーブルが六十位あろうか、食堂の南西の隅に「ファカルティ・ダイニング」とプレートの付いた教職員専用の食堂があり、扉が閉っているが電燈はついているところを見ると誰か中にいるらしい。（大学も高校も皆そうだった。大学のは調理機器、調理士、食器、献立も生徒用とは異なり、ラウンジまでついた豪華なものだった）。部屋の三分の一は調理場兼食品陳列ケースになって居り、右は温い食品、左はサンドウィッチ等の冷たい食品を陳列してある。生徒は列のまま、自分のほしいものを取り出口の会計係に料金を支払う仕組になっている。食べ終わると紙製品（ミルク、ジュース、サンドウィッチの入れもの）、プラスチック製品（フォーク、ナイフ、スプーン、コップ、皿など）は大きなポリのくず入れに投げ込み盆だけは炊事婦に渡す。（セルフ・サービスの食堂は一般市民のものも皆この形であった）。夏でもあり、サンドウィッチ類の売れ行きが良かった。特に、この学校のアア・ボーイと呼ばれるサンドウィッチを見てみよう。代金二十五セント（八十円位）でコッペの小型一個の間に、五種類の厚さの十五センチ角のハムソーセージ各一枚、同じ厚さ、大きさのチーズ二枚、レタスの葉一枚をはさんであり内容は質量ともに上等。（私等これ一つに、ポンカンに似たミカン一個（十五セント）、ミルク（十五セント）を食べると満腹になる。）

器具の多い図書館

食堂を出てそのまま進むと他の所より一段低くなって芝生の原に出る。もう何十人かの生徒が遊んでおり、近づくと物おじしないで「柔道知っているか」「空手（ケラチと聞こえる）を知っているか」ときく。（ここには日本人はいないじゃないかという話だったが、生徒の話によると一人居て、柔道の道場を開いているとのこと）

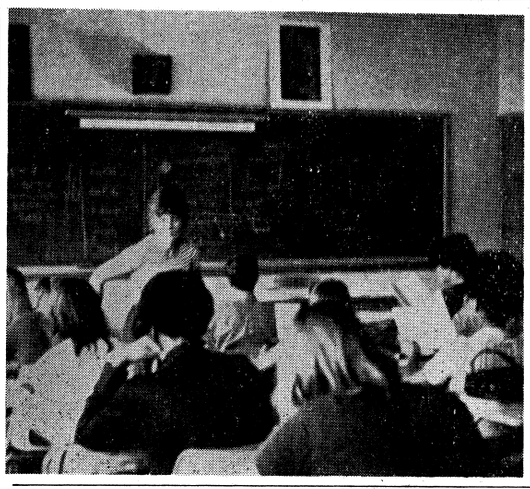
時間中もそうだが、生徒の英語は大変速口である。二・三回言ってもらってやっとわかることが多かった。だから私の話しは聞伸びがしていて聞きにくいらしい。日本人向きに言ってくれているんだなと思った。ニューヨーカー（ニューヨーク市民）の英語は速口だという先生が多いが、ここの生徒達の英語は又異った速さだ。（大人や高校生になると、正しい言葉言い換え方、外国人へのゆっくりした言い方が出来るのだが）

さて、遊んでいる中にベルが鳴り、生徒は教室に向う。私は、エスケープするものがいるか見てやろうと裏に回ることにする。

芝生の上に散らばってる紙切れを拾いながら右に回り、運動場に下りる階段の所に来ると中二・三年と思える生徒数名が、煙草を吸っている一人を囲んで坐って話をしている。私の顔を見ると、煙草を吸っていたのを残して皆去って行った。ゆっくり近づいて、「授業はないのか」というと「ぼくはブリタニーの学生ではない。もう卒業したんだ」と答えた。嘘のようでもなかったので「済まなかった」と言って、さっさと立ち去る。生徒達同志もあまり手伝いあっているようすもない。余り可愛そうだから、何人かの手伝ってやる。「説明書を見せてごらん、いいか、こうやるんだよ。先づ何度か回して目盛を0に合わ次に右回り18の目盛に合わし、0へ戻し、右回りに目盛り18を二回通りこして0に合わせる。（この部分を誤まっている。都合三回目に0に合わせるわけだ）次に逆に回して目盛35に合わし、0に戻り、右に回して目盛り35に合わし0に戻り、右に回して目盛55に合わし、取手を左に捻じながら力強く引くんだ。ほら、開くだろう。今度は自分でやってごらん」とある生徒を手伝ってやる。何故か周囲の生徒が立ち止まって私の方を見ているような気がしたので、立ち上ってみると、果たして、私は皆の注視の的になっている。「何故かな？…ああ、そうか、他人の私物を入れる所の番号を覚えてどうする？他人に聞こえるように大声で言ってどうする？ロッカーの意味はない。大事な物が失せていらどうするか。マレー先生は冷たいのではない。他の意味からも何十分かかろうと自分でやらせるつもりだったんだ。」と始めて気が付く。

二度敗した彼が助けを求めるように見上げた時は「私はもう番号も順序も覚えていないし、君は納得いくまで読んでやってみることだ」と言って、窓から外を眺めていると、やがてポンポンと背中をたたき「出来たよ。ありがとう、もう一度やってみるから見ていてくれ」とニコニコしながら彼が言った時はもう皆入室していた。

次の時間は英語科では「プランの時間」で中二・三担任の先生の打合わせ会と時間表には書いてあるが、今日は全校体育館に集合して日本でいう始業式である。尚時間割は毎日同じ、一日七時間で、生徒は七教科選択しなければならない。授業は月曜日から金曜日までである。



新入生とのふれあい

副校長室、一般事務室、校長室、校長秘書室と並んだ南北に伸びる棟と東西の棟との合流部に「アテンダンス」と書いたプレートのついた部屋が見える「はい、ここが出欠係の部屋だな」とうぶやきながら中に入ってみる。生徒が二・三名遅れた理由を書類に記入している。係は各教室から回収して来た名表を見て、大急ぎで欠席者、遅刻者の印をつけ、第二限の始まりまでに各先生に渡す準備をしている。（欠席者は隣のカウンセラーに報告すると共に、家庭に電話のあるものは、電話をかけて聞くとのこと）

「アテンダンス」の部屋を出ると、一年生の初日を見たくて階段を上がって、一番手前のミスター・マレ（社会科担当）の教室に入る。新入生にロッカーの使い方、錠のあけ方を説明している。錠のあけ方は仲々複雑である。愈々説明も終り、実際にやることになる。生徒は自分のロッカー専用の説明書（小さい紙切れだが）を貰って廊下に出る。一度ずつとあけた生徒もおれば、何度やってもできない生徒もいる。先生は余り手伝わない。生徒に質問されると、狂っていないか試みるため自分で一度開けて「よく説明書を見なさい」と言って、さっさと立ち去る。生徒達同志もあまり手伝いあっているようすもない。余り可愛そうだから、何人かの手伝ってやる。「説明書を見せてごらん、いいか、こうやるんだよ。先づ何度か回して目盛を0に合わ次に右回り18の目盛に合わし、0へ戻し、右回りに目盛り18を二回通りこして0に合わせる。（この部分を誤まっている。都合三回目に0に合わせるわけだ）次に逆に回して目盛35に合わし、0に戻り、右に回して目盛り35に合わし0に戻り、右に回して目盛55に合わし、取手を左に捻じながら力強く引くんだ。ほら、開くだろう。今度は自分でやってごらん」とある生徒を手伝ってやる。何故か周囲の生徒が立ち止まって私の方を見ているような気がしたので、立ち上ってみると、果たして、私は皆の注視の的になっている。「何故かな？…ああ、そうか、他人の私物を入れる所の番号を覚えてどうする？他人に聞こえるように大声で言ってどうする？ロッカーの意味はない。大事な物が失せていらどうするか。マレー先生は冷たいのではない。他の意味からも何十分かかろうと自分でやらせるつもりだったんだ。」と始めて気が付く。

二度敗した彼が助けを求めるように見上げた時は「私はもう番号も順序も覚えていないし、君は納得いくまで読んでやってみることだ」と言って、窓から外を眺めていると、やがてポンポンと背中をたたき「出来たよ。ありがとう、もう一度やってみるから見ていてくれ」とニコニコしながら彼が言った時はもう皆入室していた。

次の時間は英語科では「プランの時間」で中二・三担任の先生の打合わせ会と時間表には書いてあるが、今日は全校体育館に集合して日本でいう始業式である。尚時間割は毎日同じ、一日七時間で、生徒は七教科選択しなければならない。授業は月曜日から金曜日までである。

「日本よりやり易い」

さて一日の課業が終りました。ホームも掃除もありません。クラブはどうするかと待っていると、皆三々五々と帰って行き、遠い組はスクールバスに乗り込む。一人の生徒に聞いてみる。「クラブはないのか」「そんなもの知らないよ」「君達は勉強以外にスポーツとか音楽とかやりたいことがあるだろうにどうするか」「家の近くにフットボールチームがあるから出来る」と答える。（後日先生に質問すると、「早く生徒が帰らなければならないからできない」。他の先生は「誰もやる人（先生の意）がいない。昨年は合唱部、ダンス部、合奏部などありましたけど」といった）気落ちしながら、英語の職員室に帰るともう先生方は帰宅準備。「明日、又会いましょう。バイバイ」と別れを告げる。私も校長に別れの挨拶をし、学校を去る。途中、気さくなクロス・ガードの老人と立話をした後一路サワー家へ向う。

追　記

※私はアメリカの公立中学校も日本と同じで時間中騒がしいなあと思っていたら、他の地方に行った研修員から大変静かで、日本より易そうだと聞かされた。

※都市部の学校には問題児が多いので、白人や教養のある黒人は私立中高に子供を入学させたり、越境して田舎の学校にやりたがるとセントルイスのある新聞に書いてあった。田舎の中・高に行った研修員達は問題児らしい生徒は見かけなかったとのこと。又女子市立中高に行った研修員は問題児などいないし、校舎も設備も豪華の一言に尽きるとの事だった。

……編集後記……

札幌オリンピックで始まり、新首相誕生、日中国交回復とあわただしかった一九七二年も、共産党の大躍進であった総選挙を最後に暮れようとしている。

本校に於いては心配された後期熟行部も成立し、我が新聞部も年内発行ができほっとしている。

ある生徒の川柳に

年の暮れ

今年の抱負

まだできず

というのがあるが、年の暮れにはいつも来年こそは……と思うのである。

川村時計店
高知市帯屋町２―１―28　１Ｆ　ジェリーフロア　ＴＥＬ　22―0123

3F ミュージックフロアー
2F メンズフロアー
1F ジュエリーフロアー
ESCALATOR
川村時計店

レコードの川村
高知市帯屋町２―１―28　３Ｆ　ジェリーフロア　ＴＥＬ　75―5271

1F……学生服
2F……カジュアル
学生服専門店
児島屋
高知・帯屋町二丁目
ＴＥＬ㉒五五一一

趣味の陶器を沢山揃えております
依光陶美堂
高知市オビヤ町　ＴＥＬ㉒2321

〝土佐名産〟
特製〝金波〟
立石（重馬）蒲鉾店
高知市はりまや町１丁目２番９号
大丸東側　ＴＥＬ㉒6279
（野村証券北隣）

土佐名産サンゴと
宝石は
池田サンゴ店
高知市帯屋町一丁目
ＴＥＬ㉒0358

望まれる対策……学校

生徒……目立つ管理不備

盗難はもういや！

▽去る十一月十四日、二年Ｄホームで千五百円余りが盗まれるという事件があった。被害にあったのは三人で、いづれも体育の時間に教室を留守にした際に盗まれたものらしい。また、同二十一日にも同じ二年Ｄホームで二千円余りが盗まれた。被害者は三人で、これも体育の時間の際に賊が侵入したもので、犯人は同一人物らしい。今学期の初めにも高二で二万円余りの盗難があった他、女子更衣室からスカートなどが盗まれるなど、盗難騒ぎが相次いでいただけに、さながら〝ドロボウ天国〟の本校の状態に、学校も頭をいためている。

△

そこで問題になってくるのは、被害者の態度である。

たとえば、十四日の盗難はまったく届け出がなく、新聞部が情報を入手して二年の担任に届け出たのが最初といった状態で、宮村先生（二Ｄ担任）にとって〝寝耳に水〟といった感じだった。そしてその内偵をしている矢先に二十一日の盗難が起こったわけである。これら二つの事件は完全に葬られていたかも知れない。まったく無関心にも程がある。

また、なぜこんなに金品を盗まれるようなことをするのだろう。これまでの盗難事件では、いずれの場合も一人千円位は盗まれている。特別の場合を除いて、どうしてこんなに持ってくる必要があるのだろう。これでは盗んでくれといわんばかりに持って来ているといわれてもしかたあるまい。

△学校側の態度▽

今まで、いづれの場合もそうであるように、学校は、たび重なる盗難事件に、あまり無頓着すぎたのではないだろうか。第一、対策といえるべきものを何一つたてていない、といっても過言でない。クラスによっては、貴重品袋あるいは、ロッカーの錠を義務づけなどして盗難に対処しているが、学校の統一した指導というものはなされていない。所持品の管理は個人の責任ではあるが、かといって、ほとんど本人まかせの指導では対策とはいえないのではあるまいか。

△被害者の意見…▽

「僕はよく知らないけれど、学校は警察に届け出てないじゃないか。これではあまりにも手ぬるすぎるじゃないか。犯人を捕えられなくても一応〝おどし〟という意味での効果はあるはずだ。何万円も盗まれているのだから、これはレッキとした盗難事件だ。絶対警察へ届けるべきだ」と、被害にあった某君（高二）はいう。

確かに警察へ届けることは非常に有効な手段かも知れない。しかし届ける事には幾分問題がある。捜査ということになると、盗む機会は全校生徒にあり、とりわけ高三ともなると、自習が非常に多くなるわけで、必然的に校内を歩き廻る機会ができ高三に捜査が集中することになるつまり、大学受験を間近にひかえた高三を動揺させることにもなりかねない警察力導入は、学校としては、どうしても使いたくないのである。

△今後の対策▽

結論からいうと、わりきった事だが、個人個人による充分な管理が必要である。その第一、一番好ましいのは、〝持ってこない〟こと。もし臨時の支出が必要なら先生方から貸りる手もある。だから学校では、昼メシ代以外は必要ない。

また学校側の対策としては、貴重品袋制度の徹底、または、ロッカーの錠をつけることを義務づけるような方向で検討すべきである。盗られる前に〝盗って〟しまえば盗られることはない。だから、貴重品袋その他の制度を学校が責任をもって行うべきである。もちろんこれには生徒の協力も必要だ。

今後は、学校、生徒が一体となってドロボウ騒ぎのない学園にするよう努力しなければならない。

ブリッジ小委を設置

中学会長　近森君

去る十月二十六日、会長に近森君（三Ｅ）が選ばれ後期中央委員会が発足した。約二か月遅れの発足となったわけだがこれは前期委員会の選挙準備の遅れと候補者が集まらなかったためである。ことに中央委員は男子が定員に三名足りず、女子も定員ぎりぎりで無投票信任されるなど、今回も一般生徒の生徒会活動への無関心がうかがわれた。

今度の委員会は、会長の近森君を中心に文化祭と小委員会の充実に力を入れており、特に文化祭への一般参加を呼びかけている。また、学校―生徒間の交流を主旨としたブリッジ小委を企画、三学期にクラスマッチを行なうことを計画するなど、意欲的な活動の気ざしがうかがわれる。

しかし一方では、二か月に及ぶ執行部発足の大幅な遅れで文化祭小委での話が進まず足踏状態が続いていた。十月末から募集されていた補欠選手も候補者不足のため、その開催は十二月まで延長された。一般生徒の無関心が生徒会活動に大きな支障をきたしていることは事実である。

また、仮学認のＰＲ小委会では生徒手帳の間略版の制作を終えた後、機関紙の発行程度の仕事しか予定されしおらず〝必要なし〟との声もとがっている。

このように委員会のヤル気だけでは解決できない諸問題の中で、後期中央委員会はけっして好調とは言えないすべり出しを見せている。

後期中央委員会メンバー

会　長…近森大志郎（三Ｅ）
副会長…北島　勲（三Ｃ）
　　…依光　成元（三Ｅ）
中央委員…竹林　淳（三Ｅ）
　　…上田　祐二（三Ｅ）
　　…加藤　康人（三Ａ）
　　…永森　郁子（三Ｅ）
　　…野甲　尚人（三Ｅ）
　　…山本　主真（一Ｄ）

〝学校〟即ち……

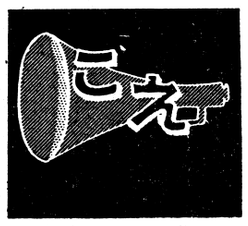
〝学校〟即ち辞書によると、「教師の指導により、学芸を学ぶ所」とあり〝教育〟とはまた辞書によると「①教え育てること②一定の方法で未成熟者の心身を発達させること」とある。〝教師〟とは「教育を業とする人」とある。教師＝「未成年の指導者」ということになる。しかし指導者とは、おしつけられるものであろうか？

とにかくその指導者が、学生服を着ろという。帽子をかぶれという。また指導者が、○○をするな××をするなという。「指導者の方々、我々はいったいどうしたらいいでしょう？勉強、あっそう勉強。そうだねあなた方がぼくらにいって、ある程度従がってもらえるのはこれだけだからね」

先頃、生徒総会なる甘えきったものをやった。司会「お次どうぞ」○○君「……しょうではありませんか」「次は○○先生に伺います」「そうだねエ……こういうことになったのは……」司会「これをまとめると……となります」罵声「どうして○○先生が生徒総会の司会をなさってんですか？」司会「授業だから……」

生徒の中で「あほらしい」の声が床に響く。何か緊張したものがしだいに破けていった。

髪の長さは各ホームの主任に任されたそうである。かわいそうに主任に刈られた者もおるそうな。そして次はおれの番だと、ビクビクしている奴もいるそうな。あーあ、何故だろう。ズボンをたしてゴム長をはき、両手をズボンのポケットに入れて歩くのには、それが一番似合うのに。もういっそ坊主頭にしたらどうだろう。六千数百円払って。坊主にして…



〝規則は破られるためにある〟とは誰のいったことばかしらないが指導者の方々も、悠久の昔に覚えのあることだろう。校則を破ってさも得意そうに話す幸せなわれわれ。長い髪は何のため、喫茶店いくのは何のため、指導者が怒るのは何のため。昔〝ひょっこりひょうたん島〟に次のような歌詞の歌があった。

勉強なさい、勉強なさい、大人は子供に命令するよ、勉強なさい、偉い人になるため、ああそんなの聞きあきた。

いいえ、よい大人になるためよ男らしい男、女らしい女、人間らしい人間、そうよ人間になるためにさあ勉強なさい。

さあ勉強しましょうか。

（ふくろー）

ディスカバー　ホーム

僕はいつも思うのだが、朝のホームの時間をもっと有効に使うことはできないものだろうか。「起立。礼」「おはよ……」「別に連絡事項なし、そしたら終り」「起立。礼」「……」これはいったいどういうことだ。味もそっけもないじゃないか。僕らはただ勉強だけをしに学校へ来ているんではないんだろう。そしたらホームぐらいもっと味のあるものにしてもいいじゃないか。放送をフルに活用させてもいいし、週に一度ぐらいはみんなで校庭に出て体操をやるのもいいじゃないか。朝の十分、何か利用しようではないか。ディスカバーホーム！

（高一Ｍ・Ｈ）

西本　貞先生

出番です

もうぼくの「出番」は来まいと思っていたのに、突然「楽屋」へひきずり込まれてしまった。さて、昔の話からはじめようか。

古い話で申訳ないが、大正十四年の三月の初め頃。ぼくの家は貧乏の絶頂であった。父は長い病気で会社はやめるし、ぼく達兄弟の学資にと貯金してあったかなりの金は、父の療養に使いはたしていた。ぼくはいまの土佐市の祖父母の所で育てられて蓮池村（いま土佐市）の小学校に通っていた。村の方でも、かなりの財産家であったぼくの家も、祖父のもの好きな企業癖のため、山も田も順々に売り払って、全くの没落といった世界を幼いぼくは感じつづけながら日々を送っていた。正に不景気な話である。

その頃、高知にいる父から手紙が来た。土佐中学という中学校がある。学費が少なくてすむそうだから、学校の先生にお願いして入試を受けてみるようにせよというのである。田舎の貧村の小学校で中学校に入学する生徒なんか、数年に一人といった有様だったから先生は大いに乗り気で入学案内をとりよせてくれた。

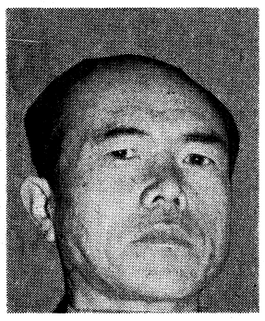
入学志願の条件として、席次が級の一割以内たるべきことなっている。その時の六年生の級の生徒は十七・八名で、ぼくは二番であったが、先生が、「なに、番はこれでもよい」というので、いよいよ受験勉強にとりかかった。

早速学校の応接間を勉強室にあてがわれ、放課後の暮れかかるまで、算数、国語を少しずつやりはじめた。入学準備の勉強なら全々やらせた事のない田舎の学校のことだから大した力がついたとは思えない。数日の後、先生によばれた。「西本君。土佐中学の試験はもうすんでいたよ」ということである。あの程度の勉強で受かったかどうか心細いものであるが先生はがっかりしたようであった。ぼくは別におしいとも思わなかった。当時の県立中学校の入学試験は三月二十七日（丁度小学校の卒業式の日）ときまっていたが、土佐中学校の場合、県立よりは早目に行なったらしい。「田舎者の喜劇一巻の終り」である。

併し、その後四十何年目に、その学校の教師になったのだから妙なまわり合わせである。

話はまた前にもどる。県立の中学校へ進む経済的な余裕がなかった。当時の県立中学校のときから習いたくてたまらなかった「英語」の授業があるのが何よりうれしかった。正に背丈が一度に一寸位のびた様な感じであった。その後貧乏人の子弟の進学コースを歩いて、「師範学校」という校学に入った（今ではこの学校の事は学制改革で諸く姿を消してしまった。よくよく「母校」に縁のうすい男である。その後、いろいろの事があった。四十二才にして大学卒業証書をもらい、学士号を与えられたが、学的に強く影響をうけた数名の教授は、ぼくより二つ三つ年下であるが、お陰で自称学術論文と名づける雑文が書けるようになった。さて今後どんな運命が待っていることやら「老のくりこと」はこの辺で筆をおく方がよさそうである。

ときの体の中からわき出るようなしさには比すべくもなかった。まことにほろにがい話である。



学生時代

「師範学校」も今では昇格して高知大の教育学部になってしまったし、思い出深い高等小学校は学制改革で諸く姿を消してしまった。よくよく「母校」に縁のうすい男である。その後、いろいろの事があった。四十二才にして大学卒業証書をもらい、学士号を与えられたが、学的にいことを知っていたぼくは、強いて中学校へ上げてくれとは言わなかった。高岡町（今土佐市の中心）の高等小学校へ入学した。高等小学校へ入学したものは十七・八名の卒業生の中で六名位であった「嗚呼」の帽章の学校であり、土地の教育の中心であり、子供達の憧れのまとであった。ここでは、生徒が袴をつけて登校しているのもすばらしい、と思った。何より、小学校を卒業すると、ほとんどの者が丁稚奉公に出されるのが普通であったから、中学校へ入学できるということは、大変なことであった。

スポーツ

個人戦で大活躍

硬庭　バドミントン

▽硬式　庭球

十一月二十三日に市営コートで行なわれた県高校新人戦シングルス決勝で、堀見君（一Ｋ）と西君（一Ｋ）が対戦し堀見君が優勝した。また同ダブルスでは、堀見・西組が高知の竹内・林組を破り優勝した。優勝した堀見君は「優勝が決まった瞬間は第一シードの重任をはたしてほっとした。二回戦、三回戦と進むにつれて調子がよくなり当たってきた。決勝戦は最高のできだった」と言っていた。

▽バドミントン部

去る十一月十八・十九日の両日県民ホールで開かれた県秋季バドミントン選手権大会のダブルス決勝で、窪内（一Ｈ）・樋口（一Ｋ）組が、学芸の橋本・松田組と対戦し、惜しくも敗れた。また同シングルス決勝では、樋口君が橋本君を敗り優勝した。優勝した樋口君は「たいへんうれしい。今まで練習したかいがあったと思う。クジ運に恵まれ、準々決までは楽だったが、準決、決勝は逆転だっただけに感激もひとしおであった。今後とも練習を積み重ねさらに力をつけたい」と言っていた。

野　球　部

十一月三日から六日間、高知市営球場で行なわれた第二十五回四国地区秋季高校野球県予選大会で本校は一回戦で清水に十四―〇、二回戦で高知西に十一―二、代表決定戦では中央を十九―〇で破り決勝戦に進出したが、高知商に六―五の少差で敗れた。

しかし二十三日から四日間、徳島県営球場で開かれた四国大会に出場することができた。同大会では一回戦で愛媛県第一位の今治西と戦い、七―二で惜しくも敗れた。

陸　上　部

去る九月十五日午前八時半から高知市営陸上競技場で行なわれた第二回高校新人陸上対抗選手権大会では、杉本君（一Ｈ）が三段跳びで三位、また走り幅跳びでは四位（大会タイ）に終わった。

▽バスケット部

県民ホールで行なわれた県高校バスケットボール秋季選手権大会の男子の決勝戦は、春の選手権同様に本校と高知東工の間で県一が争われ、本校は善戦むなしく二位に終わった。

ギター部　発表会

去る十一月十四日にギター部の第二回定期発表会が開かれた。一時三十分部長の坂本康紀君（二Ｓ）のあいさつの後、第一部がはじまった。

今回の発表会は四部に分かれ、第一部は「さくら」など民謡三曲、第二部は「ＦＡＮＴＡＳ」他八曲を独奏、二重奏で演奏し、第三部は「ロシアより愛をこめて」など、ポピュラー、最後は「軍隊行進曲」他一曲クラシックでしめくくった。

演奏のあい間には志和君（三Ｋ）の巧みな司会やバックミュージックを流すなど細部まで手のいきとどいたコンサートで「七つの子」などだれもが知っている曲や話題をよんだ映画音楽など、趣向をこらして観客の興味をひこうとしたが、会場には華やかさがなく内容もマンネリ化していた。また、途中で帰る人も多くみうけられ、せっかくの趣向も裏目にでたようだった。

最後に井上先生が、アンコールとして「禁じられた遊び」を演奏され、発表会は三時二十分に幕を閉じた。

今回の発表会について、顧問の井上先生は、「もっと興味をもってもらえる曲を演奏するのが今後の課題だ」と語り。ある部員は、「前回より進歩はあった。まあ文化祭の演奏をまっていて下さい。」と自信のほどをのぞかせていた。

校内短信

◇…去る九月十二日、本校の土居徹先生に待望の長男が誕生した。名前は雅樹ちゃん、生まれた時の体重は三七〇〇グラムだそうで、周囲の人たちから〝大きい、大きい〟と言われるほどの健康な赤ちゃんだとのこと。当の土居先生もさすがにうれしさは隠し切れないようすで「動物だからお腹がすけばすぐ泣くし、今のところ赤ちゃん中心のペースで少ししんどいよ」と話しておられた。

◇…最近の流行が反映してか、問題になっていた頭髪については主任に委任されることになった。

◇…十月二十二日から鹿児島で行なわれた第二十七回国体に、本校からも岡部先生に付き添われて、硬庭の西君（二Ｋ）と堀見君（一Ｋ）、軟庭の池君（二Ｏ）と吉村君（二Ｈ）が出場した。

◇…去る十一月十八日（土）中央公民館で開かれた高校演劇コンクールに本校演劇同好会が参加し、〝夕鶴〟で努力賞を獲得。

◇…生徒部長の永野先生が、十一月上旬から細木病院に入院されている。病名はまだ検査中とのことなお、高三の授業は森木先生が担当し、高一は自習している。

熊野先生御逝去

去る十月十九日、熊野義雄先生が御自宅で心臓発作のため亡くなられた。

同先生は、今年六十八才であったが、一年程前まで本校で数学を担当なさっており、今でも時々欠勤した先生に変わって授業を受け持たれるなどまだまだお元気であった。

西野先生談

熊野先生とは、国語と数学の担当のちがいからあまり親しくお付合いしていなかったが、合理的な考えを持った方だった。仲々頭のよい人で熱心に勉強なさっていたようだ。今度のことは、ほんとに突然のことで、驚き残念に思っている。

△熊野義雄先生略歴▽

大正十三年三月	高知県師範学校卒
大正十三年三月	高知市高等小学校訓導
大正十三年四月	東京高等師範学校入学
昭和三年三月	同校卒
同　三月	宮崎県飯肥中学校に赴任
昭和二十六年三月	公立学校退職
同　三月	本校に赴任

＊学生募集

●グラフィックデザイン　●テキスタイルデザイン
●デスプレイデザイン　●衣服デザイン
●イラストレーション　●造園デザイン
●工業デザイン　●写真デザイン
●インテリアデザイン

男女共学
国鉄・私鉄全線学割有
案内書Ｓ係宛〒共200円

NAMBA designer gakuin なんばデザイナー学院
大阪市浪速区日本橋東４―14　高島屋東別館南３筋目東30m　〒556　06(641)5544(代)
（地下鉄「なんば」下車徒歩10分・「恵美須町」〈えびすちょう〉下車徒歩４分）